

知られざる言語学者・菊池慧一郎補遺

長田俊樹

1. はじめに

菊池慧一郎の人と業績について、『KOTONOHA』第219号に「知られざる言語学者・菊池慧一郎」としてまとめた。

その後、実家から菊池慧一郎が長田夏樹宛に書いたハガキが見つかった。姉がコピーして送ってくれたので、そのハガキの文面を翻刻してここに紹介する。というのも、前回の拙論を補完する事実が明らかになったからである。

前回みたように、菊池慧一郎は「英語・独語・仏語・ギリシア・ラテン・イタリア・スペイン・サンスクリット・アラビア・ペルシア・マレー・シリア・ヒンドスタニー・ウルドゥー・ヘブライ・ジャバ・蒙古・西藏・満州・ビルマ・タイ・ロシア語」の言語に通じていた。そのうち、拙論で紹介したのは西欧の主要言語を除くと、ギリシア語、ラテン語、サンスクリット語、アラビア語、マレー語、ヘブライ語などで、とくに、父が残した「菊池書類」を検討しながら、父が菊池慧一郎からアラビア語やトルコ語、マレー語を習っていたことを指摘した。しかし、前回の拙論では、その他の言語について、それらを学んだという事実は確認できなかった。

今回紹介するのは菊池から父宛のハガキである。そのハガキから、前回確認できなかった、満洲語やチベット語、ビルマ語を菊池が実際に習得していたことがあきらかになった。そこでここに紹介する次第である。

2. 菊池先生からのハガキ

ハガキは全部で五通ある。

前回みたように、長田夏樹は菊池慧一郎からアラビア語やトルコ語、マレー語を習っていた。しかし、これら手紙から、菊池が満洲語やチベット語、ビルマ語を習得していた事実があきらかになった。

それでは年代が古い順に、ハガキを紹介していこう。

第一のハガキ

昭和17年10月22日

茨木県下中妻村内原

満蒙開拓青少年義勇軍訓練所内

華北交通講習会第一小隊

長田夏樹勇士

先日は端書多謝大いにやっとなるか。僕も多忙ぢや。梵語はヴェータを一寸入れてやったぞ。そろ八仕上げにかゝる。竹内氏感心にまだ来てゐる。辞書はまだ出ぬ。竹内先生の口は大して面白くない。所で北支はとても気候が悪い。僕の知人でもピンハしてゐた奴が肺炎でコロリと死んだり、青島へ保

養に出たり、其点で一考へさせられる。めったに軍医さんでも現行犯以外に帰へすことはまづないだらうとも思ふのだが。チャンドラ ダスのチベット辞書も手に這入った。実は満洲語の満露辞典がみつかったのだがね、支那印影本で何と三百八十円、そんなに稀なものか。ほしいが考へさせられてゐる、押さへてはあるのだがね。傘は其うちとゞけるよ。善隣はどうしてゐるか。久々で筆をとつたが、さて君の端書が誠にうづもれて判らない。あつた八。梵も亜もあまり人間がへらないよ。十円のせいだらうか。

1942年10月に長田夏樹が何をしていたのか。ここで、長田夏樹年譜をみておこう。

1942(昭和17)年

9月 華北交通株式会社に入社する。

10月1日 本籍地長野県の松本連隊に入営する。しかし、雨中の訓練により肋膜炎が再発し即日帰京となる。

10月 内原訓練所で華北交通の研修を受ける。

11月 同期入社社員と一緒に北京に向かう。神戸から大連まで連絡船、満鉄の汽車で奉天経由北京へ。27日、零下20度の張家口に着任。加来健太郎氏ら4名と一緒に。華北交通の青年隊舎に落ち着く。暖房は効いているが、机もなく、勉学の環境は皆無。張家口駅では、切符切り、集札、旅客案内と一通り旅客業務をおこなう。

「10月 内原訓練所で華北交通の研修を受ける」とあるが、そのときに送られてきたハガキだとわかる。宛名が「長田夏樹勇士」になっているのは、菊池慧一郎流のジョークなのであろう。

一方の菊池は梵語とアラビア語の語学講座をしている最中である。前回、以下のように紹介した。

長田夏樹が保管していた「菊池書類」には、昭和17(1942)年9月からの大日本回教協会主催による「回教圏語学講座」として、アラビア語講習の申込書と梵語の申込書が残っている。どちらも講師は菊池慧一郎先生とある。同時に開催される語学講座で、月曜と木曜がアラビア語、水曜と金曜が梵語で三か月で講了とある。

ハガキの中に、「梵も亜もあまり人間がへらないよ。十円のせいだらうか」とあるが、このアラビア語と梵語の語学講座のことをさし、受講料が10円と高いからやめないのだろうと感想を述べている。

ここに出てくる「竹内氏、竹内先生」は竹内幾之助を指す。

竹内幾之助とは、父長田夏樹の先生にあたる。年譜をみておこう。

1939(昭和14)年

3月 東京府立第二中学校を卒業する。

4月 東京外国語学校蒙古語部に入学する。蒙古語・ロシア語・中国語を学習する。また、文芸班、剛健班(登山部)、ペガソ乗馬会に所属する。

1940(昭和15)年

7 月 東京外語フランス文化会でフランス語の講習を受ける。また、東京外語ドイツ語会でドイツ語の講習を受ける。

8 月 この頃、外語蒙古語教授竹内幾之助先生の依頼で、「モンゴル語索引カード」作成の手伝いをする。

竹内幾之助について、『東京外国語大学史』の二木博史「蒙古学科の誕生と発展 1908-1945」<sup>1</sup>がくわしいので、以下に引用する。

出村の後任は竹内幾之助で、外語が四年制になって最初の卒業生のひとりである。一九三三、三四年度に非常勤講師をつとめたあと、三五年に助教授の辞令をえた。彼は一九三一年夏には、江上波夫を中心とした、東亜考古学会のシレーンゴル調査隊にも参加し、その報告書『蒙古高原横断記』（朝日新聞社、一九三七年）では、言語と宗教の項を執筆している。ほかに著書としては、「実用蒙古語会話」（大学書林、一九四一年）などの会話書、教科書がある。

出村が未完成のまま残した部分を竹内が補い「蒙古語四週間」として一九三九年に大学書林から出版した。一九四二年八月に改訂第五版、三千部が出ているので、当時としては、相当よく売れたことがわかる。この教科書は、戦後も新版がでている。

竹内は戦後まもなく一九四六年に病死した（享年四一歳）。初期の教授は二人（出村、竹内）とも、十分な学問的業績を出すまもなく、若くして亡くなった。（二木 1999 : 1005-1006）

竹内は 1946 年に 41 歳だから、父の 15 歳上、菊池の 10 歳下にあたる。竹内は父に誘われて、菊池の梵語講座を受講したのだと思われる。

竹内の前任者である出村良一についても、二木(1990)をみておこう。

一九二五年四月から、拓殖科を卒業したばかりの出村良一が、助教授として教えはじめた。一九三〇年には「蒙古語主任」に就任する。しかし「ウラル・アルタイ系言語の研究において学界からその将来を嘱望されていたこの若い学徒」（神谷衡平の表現）は、病をえて、一九三二年八月に三十歳でこの世を去った。（二木 1999 : 1005）

父の出身学科だった蒙古語学科の教授たちが次々と亡くなっていったが、父からその事実を告げられることはなく、うかつにも、今回調べてみて初めて知った。肋膜炎を病み、中国大陸で活動していた父はいつも死を意識していたはずだが、他人の死について決して口にすることはなかった。自分もいつ死んでいたかわからないという思いがそうさせていたのかもしれない。

このハガキで言語に関連したことを箇条書きでまとめておく。

1. 今おこなっている梵語講座ではヴェーダについても言及していること。梵語と一言で言っても、ヴェーダ時代のもとのウパニシャッド時代のものではことなるが、古いヴェーダの梵語についても梵語講座で教えたということだろう。

---

<sup>1</sup> 東京外国語大学の以下のサイトからダウンロードできる。  
<http://www.tufs.ac.jp/common/archives/history.html#Mongolian>

2. 「辞書はまだ出ぬ」とあるが、第三のハガキにあるように、菊池が何かの辞書を計画していたことはまちがいない。それがアラビア語なのか、梵語なのか、あるいは別の言語なのかはわからない。

3. チャンドラ ダスのチベット辞書とは以下を指す。

Sarat Chandra Das (1902) A Tibetan-English Dictionary with Sanskrit Synonyms. Calcutta: Bengal Secretariat Book Depot.

サラト・チャンドラ・ダス(1849-1917)はベンガル人で、1879年チベットに6か月滞在し、チベット語の文書を持ち帰った。上記の辞書は千頁を越す浩瀚なもので、Graham Sandberg と Augustus William Heyde との共著である。現在、この辞書のPDFはいくつかのサイトから手に入れることができる<sup>2</sup>。なお、支那印影本とあるが、印影は影印のまちがいか。影印とは複製本を指す。

4. 満洲語の満露辞典とは1875年に出たザハロフの辞書を指すと思われる。こちらも千頁を優に越す辞書である。石濱純太郎(1938)は羽田亨編『満和辞典』刊行(1937年)の際、この辞典の書評を書いている。その書評でこれまでの満洲語の辞典を紹介し、このザハロフの辞典などをあげた後「然し此等の辞典は稿本は論外だが、刊本も稀購に属して入手し難い」<sup>3</sup>と述べている。しかし、こうした稀覯本の多くは今の時代、インターネットサイトからダウンロードできる<sup>4</sup>。文献にだれでもアクセスできるということでは喜ばしいことだが、稀覯本収集に余念のなかった父などはこの状況をどう思うのであろうか。話がそれてしまった。前回紹介した菊池が通じている言語の中に満洲語があったが、このハガキからそれが確認できる。辞典を購入するというのは満洲語がある程度読めたことを意味する。なお、物価変動をみると、今の値段はその当時の値段の700倍ぐらいなので、この満露辞典は今の値段では25万円以上という高値である。その後菊池が大枚をはたいて購入したかどうかはわからない。

なお、「善隣」と名前が出てくる人が誰を指すのかは不明。善隣協会に関わっていて、菊池の語学講座を受けた仲間だと思われる。

第二のハガキ

昭和18年1月30日

支那行

蒙疆 張家口市

華北交通 青年隊舎二十八号

長田 夏樹 蒙古

去年は端書を貰った、ちとボヤ八してゐる端書だつたな。近頃はどうか、ちつとは仕事も板につき出したらう。善隣に先週の日曜に始めて会った。正月元旦には僕が不在で会へなかつたのだ。張り切

<sup>2</sup> <https://archive.org/details/tibetanenglishdi00dassuoft> (2021年3月31日サイトにアクセス) また、<https://pahar.in/wpfb-file/1902-a-tibetan-english-dictionary-by-sarat-chandra-das-s-pdf/>からもダウンロード可能である。グーグルのサイトにも、二種のインド・リプリント版があるが、いずれもダウンロードはできない。なお、臨川書店がリプリントして、9000円で販売している。

<sup>3</sup> 高田時雄編(2018:227)よりの引用。ただし、世界に誇れる石濱文庫にはこの辞書が含まれている。『大阪外国語大学蔵 石濱文庫目録』(1979年版)の364頁、分類番号829.53 Z1pに掲載されている。なお、この石濱文庫目録は以下のサイトからダウンロードできる。<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/54368/ishihama1979.pdf>

<sup>4</sup> <https://altaica.ru/LIBRARY/MANCHU/zakharov.pdf> (2021年3月31日サイトのアクセス)

つてゐるよ。いゝ兵隊になつた。スタインガス上等に出来、妹の所へでも送つてやらうか、直送してもよい。とにかく手許にあるから安心してゐろ。併し我が輩の文法は素晴しく発展してしまつて、まだ入だ。竹内先生は感心につゞけて、近頃は完全にファンになつちやつた。斎藤君など偉いと云つてゐる。外では相当私もふくのですが先生(斯く呼んで呉れる)の前では完全にだめですと云つてゐる。少しは物になるであらう。

1943年1月のハガキの宛先をみると、張家口市の華北交通宿舍宛になっている。うえで引用した年譜の「張家口駅では、切符切り、集札、旅客案内と一通り旅客業務をおこなう」時期にあたる。蒙古となっているのは、菊池がつけたあだ名であらう。

ここに登場するスタインガスは以下のペルシア語・英語辞書を指すと思われる。

Steingass, Francis Joseph. A Comprehensive Persian-English dictionary, including the Arabic words and phrases to be met with in Persian literature. London: Routledge & K. Paul, 1892.

この辞書はシカゴ大学のサイト<sup>5</sup>で、ペルシア語からでも、英語からでも検索できる。辞書を引かなくても、ネットで検索できる時代になった。辞書そのものについても、インターネットからダウンロードできる<sup>6</sup>。さらに、インドの Manohar 出版社からはリプリント廉価版(今のレートで 1300 円ほど)で買える。もちろん、戦争中ではなかなか入手できなかったものであろう。父はアラビア語を菊池先生から習ったことは前回みたが、ペルシア語についても習ったのかもしれない。

ここに出てくる「善隣」と斎藤君が誰を指すのかは不明。

### 第三のハガキ

昭和18年3月13日

蒙疆 張家口市

華北交通 青年隊舎二十八号

長田 夏樹 君

蒙也蒙汝をいかんせんか。蒙ちゃんしばらく。ゴンポは首になつちやつたからもう駄目だ。我輩は絶対相不変と云ふ所、方々しびれを切らしてもはや催促もせんよ。どうせ書いてもやる奴がいないにきまつてゐるから、ゆるゝ完成するんだ。時に西藏だがね、一日に陥落しちやつたよ。あんな言葉はこけおどしだ。何の手間日間もいりはない。本当の朝めし前だつた。ビルマも。是も一日行程。なる程同系で、両方知らねば談ができんな。併し君の推定、ビルマの方に古形がありはしまいかと云ふことは当らなかつた。蔵語の方が基になる。緬語は全く其一方の略体化に過ぎない。万事が簡単化してゐる。チベット文法家に当つて見たが、皆文法力がないから駄目だ。此四月から課外講義でもしてやらうかと云つてゐるのだが。辞書はまだ何もしてゐない。君の妹はまだ顔も名も知らんし、十円の本代つきの端書ぢやおやぢに見られると気の毒だ。君の方からさしずでもしたまへよ。善隣は一度外出した以外まだ出られぬと見えるよ。

<sup>5</sup> <https://dsal.uchicago.edu/dictionaries/steingass/> (2021年4月1日アクセス)

<sup>6</sup> 以下のサイトからダウンロードできるほか academia.edu や researchgate にアップされている。  
<https://archive.org/details/AComprehensivePersian-EnglishDictionary-FrancisJosephSteingass>

第二のハガキから二か月後に書かれたのが第三のハガキである。ハガキ文面に「蒙ちゃん」とあるので、「蒙古」は菊池が夏樹につけたあだ名とみてまちがいない。

最初の「ゴンポ」とは、東京外国語学校蒙古語学科の外国人教師ゴムボジャブを指すと思われる。二木「蒙古学科の誕生と発展 1908-1945」によると、以下のように紹介されている。

外国人教師ゴムボジャブ（高穆嘉普、チャハル出身）は、一九四一年から四二年まで教えた。彼は当時の内モンゴル西部（徳王の「蒙疆政府」が支配）の代表的知識人のひとりで、マルコポーロの「東方見聞録」のモンゴル語訳を張家口で出版している。内モンゴルにもどったあと、日本軍当局に逮捕され、拷問を受け、それがもとで亡くなった。（二木 1999:1007-1008）

第三のハガキは 1943 年 3 月の日付である。このゴムボジャブが辞めたのは 1942 年だ。ちょうど符合するので、「ゴンポ」はゴムボジャブでまちがいなさう。

そうすると、以下の「我輩は絶対相不変と云ふ所、方々しびれを切らしてもはや催促もせんよ。どうせ書いてもやる奴がいないにきまつてゐるから、ゆるゝ完成するんだ」は、ゴムボジャブが首になってダメになったことと関係があるのならば、モンゴル語チャハル方言文法を執筆していたことを意味するのかもしれない。ただし、このハガキだけでは書いた人もハガキをもらった人も亡くなった今となつては確認のしようもない。

チベット語について、「一日に陥落しちゃつたよ。あんな言葉はこけおどしだ。何の手間日間もいりはない。本当の朝めし前だつた」と言っているが、信じがたい。チベット文字はある程度サンスクリットを表記するデーヴァナーガリー文字からの類推が効くが、ローマ字転写を見たことがある人にとっては、子音が並ぶ文字列を見ただけで頭が痛くなる。菊池の表現には誇張があるにしても、第四のハガキでみるように、非公開ながら講座を開くようになったのだから、ある程度チベット語を読むことができるようになったことはまちがいなさう。

チベット語とビルマ語は同じチベット・ビルマ（蔵緬）語族（もっと大きなシナ・チベット語族のチベット・ビルマ語派ともいう）に属する。チベット文字もビルマ文字も、同じインド系文字に属するが、前者は北方系、後者は南方系で、後者は素人的な見方でいえば丸まってみえる。父の「菊池書類」をみると、梵語学習やアラビア語学習においても、文字から入っているので、これらも文字から入っていったものと思われる。凡人には文字を覚えるだけでも大変であるが、これを簡単に攻略してしまう菊池には驚嘆するしかない。

「辞書はまだ何もしてゐない」とあるが、この辞書は第一のハガキに出てくるものと同じなのだろう。しかし、何語の辞書なのかはわからない。

ここにも「善隣」が出てくる。早稲田大学に保管されている「大日本回教協会寄託資料」には、語学講座受講生の名前リストがあるので、それをみればわかるのかもしれない。

第四のハガキ

昭和18年5月27日

中野区上高田一ノ一〇六

長田夏樹様

西蔵語非公開講座開講

緬甸語の基本語学

学習最も簡易なる

西蔵語の速習開始

個人的知識配給故

公開は遠慮するも

新友の紹介は随意

五月廿七日 丑 一 講 堂

講師 菊池慧一郎 (菊池、江原)

期間 六月一日開講 (毎週月末 六時—八時)

会費及申込 五円 (開講日当日講堂へ持参のこと)

会場及主催 神田駿河台一ノ一 佐藤生活館五階 丑一講堂

(ここまでは印刷されたもの、「緬甸語の基本語学」の下のスペースに赤字で以下の私信)

七海君が丸善でイエシュケの印映辞書を発見、二部あつたさうで一部買つたとのこと故、も一つも買つてしまつて呉れとたのんだから、買つて呉れてるものと思ふ。勿論君の為に。三十四五円ださうだ。喜べ八。

宛先が東京中野になっている。この辺の経緯を年譜で確認しておこう。

1943 (昭和 18) 年

4 月 肋膜炎が再発し、華北交通北京鐵路医院に入院する。一向によくなり、内地に戻って療養することになる。帰京し、多摩川保養園に入院する。

8 月 多摩川保養園を退院し、汽車で下関、船で釜山に渡り張家口に戻る。病後ということで、張家口駅の庶務に就く。

第四ハガキの日付は昭和 18 年 5 月なので、肋膜炎で日本に戻っていた時期である。

このハガキの「西蔵語非公開講座開講」のお知らせ部分は印刷されている。チベットは回教圏ではないので、梵語やアラビア語講座を開いていた大日本回教協会とは関係がない。しかし、場所は同じ佐藤生活館でおこなわれている。講習料は 5 円で、回教圏語学講座の半額である。「学習最も簡易なる西蔵語」とうたわれているが、チベット語をちらっと覗こうとしたことがある筆者には到底信じられない。

赤字の私信で「七海君」とあるが、七海吉郎のことであろう<sup>7</sup>。七海吉郎は専修大学経済学部の教授を務めた人で、専修大学の図書館長を 1962 年から 10 年間勤めている。財政学を担当する傍ら、明治大学

---

<sup>7</sup> なぜ七海吉郎とみなすのか。少し説明を加えておく。父がアフガニスタンのモンゴル語文書 *Zirni Text* を七海吉郎に送った際、御礼のハガキをいただいているが、そのハガキが父の遺品に残されている。それによると、「Glossary を見ているとまたぞろアジア語をいじってみたい欲望にかられました」とあることから、七海氏が以前アジア語に興味を持っていたことはまちがいない。

ではドイツ語を教えていたという。単なる財政学の枠組みには収まらない先生だった。というのも、七海の父、七海兵吉が三井鉱山（株）常務取締役を務めた資産家でコレクターとしても有名だった。天理図書館の収集を一手に引き受けたといわれる、古書肆「弘文荘」店主の反町茂雄によると<sup>8</sup>、「(昭和)二十五年春に七海兵吉氏の」本が売りに出され、「七海家のは国書の古写本」が主だったという。

ここに登場する「イエシュケ」の辞書とは以下を指す。

Jäschke, Heinrich August (1881) A Tibetan-English dictionary : with special reference to the prevailing dialects; to which is added an English-Tibetan vocabulary

この本もインターネットサイトからダウンロードできる<sup>9</sup>。なお、印映辞書とあるが、第一のハガキにある印影と同様、影印、つまり複製本ということであろう。

### 第五のハガキ

昭和18年7月24日

市外 調布町

上石原桜塚五五五

多摩川保養園

長田夏樹病人

入院後はどうだ。かへつて落ついて本が読めるだらう。妄想を何と読むか、大岡裁判の初めの所だ。頭脳を運用することは病人にとって最もよき運動であるんだ。医者は馬鹿だからそんなことは知らんだらうがね。所であせるとか、かゝる非科学的心情が加はつちや駄目だ。蒙古へ行くと又勉強ができなくなる、ゆつくり保養して学力を養ひ然る後に又飛出すべし。--- (判読不能。蒙古語か?) にはずい分変な文法がある。誤りではないかと思はれる奴もあり、苦心惨憺ぢや。いつか行くよ。

上の年譜で確認した様に、「多摩川保養園に入院」していた時のハガキである。宛名をみると、「長田夏樹病人」と菊池流のジョークを忘れない。

蒙古文字で書かれたと思われる部分がわからないが、「ずい分変な文法」とあるので、方言名が記されているのかもしれない。この第五のハガキは入院中の夏樹を見舞う性格上、学問上の話はほとんどない。以上がハガキの紹介とその背景の説明である。

### 3. おわりに

菊池はギリシア語教師から出発したが、それには飽き足らず、これらのハガキを父に書いた最晩年にはチベット語やビルマ語に没頭していたようだ。何の辞書だかわからないが、辞書を執筆していたことがこれらハガキから確認できる。それが出版されることもなく、埋もれてしまったのは大変残念である。

前回、菊池慧一郎の哲学者、あるいは古典文献学者としての側面ばかりが目立ち、「知られざる言語学者」とタイトルしながらも、言語学者としての側面を強調することができなかった。というのも、菊池

<sup>8</sup> 反町茂雄(1984)『蒐書家・業界・業界人』八木書店。195頁。

<sup>9</sup> <https://archive.org/details/tibetanenglishdi00jsuoft> (2021年4月1日アクセス)。臨川書店がリプリントしたものを6500円で売っている。

の最晩年を知る資料が「韋駄天アラビア語」だけで、アジア諸言語への関心を知る資料を提示できなかったことにある。小論では、菊池慧一郎の私信とはいえ、それらアジア諸言語への関心の深さを知ることができ、前回触れることのなかった菊池慧一郎の言語ハンターともいうべき研究ぶりを紹介することもできた。きっと草葉の陰で父も喜んでいることと思う。これで小論を終える。